安楽寺寺報

聞光

第８５号
報恩講号
2017/１１/1

発行所
〒７３７－００５４
呉市上山田町2-28
安楽寺
℡0823-21-7561

さるのはし

信楽晃仁

十月五日早朝、安楽寺の隣の伏原神社、そして明立小学校の裏門付近で、サルが目撃され呉市より注意喚起の連絡が入りました。もし猿に出会ったら、目を合わせない、近づかない、食べ物を見せない、そして逃げない、という対処方法が添えられていました。本当に出会った時に、それで大丈夫なのか不安でしたが、子ども達にもそのことを伝え、窓を閉めに歩いたことです。イノシシだけではなくサルまで、山から人里に出てくるようになりました。ほってはおけませんので、何等かの対策を練らなくてはなりませんが、駆除というのもかわいそうなことです。

お釈迦さまの前生物語(ジャータカ)に。サルの王様の話が有ります。

ある山の中で五百匹のサルが幸せに暮らしていました。そのサルたちは山にあるマンゴーの木になる美味しい実を食べて暮らしていました。ある日その実が一つ川に落ちて、町まで流れてしまいました。その実を拾った家来が王様に献上しました。王様はその実を食べて、こんなに美味しいマンゴーが山になっているのなら、それを取りに行こうと言いました。山の中に入り、やっとのことでそのマンゴーの木を探し当てました。すると、そのマンゴーをサルが食べているのです。王様はやっと探しだしたマンゴーをサルが食べるのを見てカンカンに怒るのです。すぐさま家来にサルどもを退治しろと命令しました。家来たちは弓矢を構えてサルを退治しようとした時、サルの王様が出てきて、サルの仲間を逃がそうとするのです。川の向こう岸に逃がすために竹を橋の代わりにして、逃がそうとするのですが、竹だけでは長さが足りず、自分が竹とマンゴーの木をもって、自らが橋になってサルの仲間たちを次から次に逃がしました。しかし五百匹のサルを逃がすとなると、その橋になったサルの王様は精根尽き果ててしまいました。最後の仲間が逃げたのを知ったサルの王様は力尽きて地面に落ちてしまいました。その力尽きたサルの王様に人間の王様が近づき「なぜそうまでして仲間を逃がすのか」と聞くとサルの王様は「仲間を守るのが、王である私のつとめ。あなたも王様なら、みんなの幸せを願って下さい」といって息を引き取ったというのです。王様はそのサルの姿に感動し、マンゴーには手をつけず山を降り、城に帰って素晴らしい王となった。というお話しが、幼稚園の「さるのはし」という絵本にあります。

特に今の時期、この絵本から考えさせられることがたくさんあります。

一枚の写真

今年の十五夜は十月四日でした。少し寒い夜でしたが、外に椅子を持ち出し、ゆっくり月見ができました。明るく、真ん丸のお月様で、雲がよく流れて、風情のあるお月様でした。伏原神社にサルが出る前の晩でしたので、サルもお月さんに誘われてふらふら出てきたのかも知れません。兎の姿は見えませんでしたが、やはりこれもお釈迦さまの前生物語から、古来、月には兎がいる事になっています。サルも兎もお釈迦さまの生まれ変わりと聞けば親近感が湧きます。

報恩講仏参

今年も報恩講の時期となりました。報恩講とは親鸞聖人のご法事です。浄土真宗の門信徒にとって一番大切な法要ですので、是非お参り下さい。各家、安楽寺でもお勤めしております。

無条件の信頼

信楽慧

前回の「結婚について」の中で少し触れました「無条件の信頼」について、もう一度私なりに考えてみました。結婚によって他人が家族になる時、その相手に対して無条件の信頼を置くことが、とても難しいことだと感じたのは「相手のあるがままを受け入れ尊重すること」が無条件の信頼だと思うからです。それに対して自分は「常に相手に理想の姿を押し付けてしまう＝相手が自分に何かしてくれることを期待している」のだと思います。いつまでたっても自分本位の私たちは、常に相手に理想の姿を投影して生きています。例えば、自分がこれだけ好きで愛してたのに浮気をされて怒り狂うような恋人の関係がわかりやすいかもしれません。このように私の中で「自分の理想の姿＝相手が自分に何かしてくれる」という思いこそが「相手のあるがままを受け入れること」のできない原因だと思うのです。

では、その「あるがままを受け入れる」にはどうしたらいいのか？僕は拠り所を「仏様」にすることで実現できるのではないかと思います。お金や地位、恋人など様々なものを拠り所として人は生きていますが、それは全て不安定なものばかりです。絶対揺らぐことのない「仏様」を拠り所とすることで偏った見方を離れ、正しく人生を生き抜くことが出来る。仏教はそのためにもあるのだと思います。

編集後記

今回、家族総出での聞光作成となりました。前住職がお浄土へ往ってからというもの、たった四頁の新聞ですが、中々紙面が埋まりません。新聞社というのは毎日数十頁の新聞を作る事を思うとその能力に感嘆いたします。家族から原稿を集めて、さながら編集長気取りで、内容と締切を心配しつつ待つことです。その点、前住職は原稿が遅れると言うことがありませんでした。いつも締切の随分前に原稿が出ていて、私の打ち込みが間に合わないことばかりでしたので、締切を心配することがなかったことを思い出します。今回締切ギリギリにもらった原稿の端々から、色々な状況が見えてきます。皆色々あるようですが、それぞれ、どうにか頑張っているようです。皆様に拙文ばかりを集めてお届けすることに大変恐縮しておりますが、前号の住職の不勉強を初めとして、寺族皆のお育てを頂きたくお願い申しあげます。合掌（K）

安楽寺マンガ通信

その３６　信楽めぐみ作

人間は知らず知らずのうちに動物たちの幸せを、我が物顔でこわしているのではないでしょうか。この物語のように、後から来てわがもの顔で動物たちのもの、それだけではなく動物たちをも搾取しています。ひょっとすると猿が人里に下りてくる原因を造ったのは私たちかも知れません。金子みすゞさんの詩はいつもそのことを指摘します。「おさかな」には

「海の魚はかわいそう。
お米は人につくられる。
牛は牧場で飼われてる。
鯉もお池で麩を貰う。
けれども海のおさかなは、
なんにも世話にならないし、
いたずら一つしないのに、
こうして私に食べられる。
ほんとに魚はかわいそう。」

かわいそうな魚、かわいそうな動物の姿が私たちに見えているのでしょうか。魚や動物だけではありません。人間も同じで、得てして力の強い国、力の強い人は、自分たちの暴挙に気づかないのかもしれません。知らず知らずのうちに、他の民族を脅かしているのではないでしょうか。今の世界情勢も、ハラスメント、イジメも根っこは同じように思います。

この度の衆議院選挙は最初大荒れでしたが、ふたを開けてみるとまた同じさやに納まっていました。何の選挙だったのでしょうか。この国を納める政治家は、国民の幸せを願ってくれているのでしょうか。当選を願った政治家は国のため、国民のことを考えてくれたのでしょうか。我欲を元とした不祥事ばかりが目につきます。一度この「さるのはし」を読んで欲しいものです。

私たちの欲望とエゴは知らず知らずのうちにたくさんの罪を犯しています。それを親鸞聖人は地獄必定と言い、地獄をすみかといわれました。その地獄が見える人がいるのです。見えないものは避けようがありません。見えないものは避けようともしないのです。仏さまの教えの中から、私たちは自らを見る目をお育て頂きます。自分の中の鬼に気づかせ、自らつくる地獄を知らせて頂くのです。

先日、中央ブロック仏婦研修会がありました。前住職も生前よく触れていた、浅原才市さんのお話を、温泉津の安楽寺の梅田淳教住職から伺いました。才市さんの一生の事績をまとまって伺うことができてともてよかったです。そのお話しの中で心に響いたのが、才市さんは晩年、周りから「立派だ立派だ」と褒められたそうです。それがイヤでイヤで仕方なかったそうです。才市さん曰く

「立派じゃないから寺参りをしているのに、鬼が寺に参って何が立派か」

と。自画像に角を描かせたのも、その鬼が見えていたからでしょう。前住職の残した信心の言葉の「地獄一定のわが身を省み、往生一定のわが身に目覚めて」と言う言葉、ここが信心の要かと思うことです。

四月には梅田淳教先生にお越しいただきます。是非ご予定下さい。才市さんの姿の中から多くのことを気づかせていただけることと思います。

悲歎述懐和讃について(お詫び)

まず皆様にお詫び申し上げます。前号夏の号で私の「小欲知足」の拙文について、ご指摘を受けました。文中に親鸞聖人の悲歎述懐和讃の「無戒名字の比丘なれど、末法濁世の世となりて、舎利弗目連にひとしくて、供養恭敬をすすめしむ」という御和讃を引かせていただきました。それを私は今の今まで、親鸞聖人が嘆かれているのは、戒律を保つこともせず、形ばかりの僧が、末法の世に思い上がって、舎利弗・目連尊者と同じところに立って、供養恭敬を皆に勧めている」という追善供養をしている僧に対する悲歎とばかり思っていました。しかしご指摘のご住職からこれは親鸞聖人が「末法の世は戒律を持たないような僧侶でも、舎利弗・目連尊者のように供養し恭敬して敬いなさい」と言われたものだということでした。つまり末法の世にあっては、僧侶の格好をしているだけでも尊いことで、その格好だけの僧侶でも、皆供養し敬いなさい、といわれるのです。それがなぜ悲歎述懐和讃なのか、親鸞さまの嘆きなのか。私としては未だ納得が行かないところですがどの解説書にも伝教大師の『末法灯明記』を元として、この和讃を作られたとありますので、そうした歴史認識があることをまずはお伝えさせて頂きます。不勉強をお詫びしつつ、この御和讃については、もう少し勉強して参りたいと思います。

お念仏のしずく

「よくよく自分について思量する」

主体をかけた聞法において、よき師に出遇って聞法するということが、やがてその人格をとおして、真実に出遇ってゆくことであるとともに、それはまた、そのまま「うそ」に出遇うということでもあるような聞法になってきます。聞法において、よき師との出遇いによって、この世とこの身が、まるまる「ウソ」であるとめざめてゆくことであります。そういう「うそ」とのであい、それへのめざめにおいてこそ、仏と出遇い、真実にふれてゆくことができるのです。そういう聞法、主体をかけた聞法が成り立ってこそ、本当によき師に出会ったといいうるものであります。自分についてよくよく思量せよといわれ、主体をかけて念仏し、聞法せよといわれる意味がここにあるわけであります。

その意味において、信心を開くについては、称名念仏することも、よき師と出会うことも大切でありますが、またそのことを、まことに成り立たしめるものは、何よりもその主体化としての、そのことを自分自身の身体にかけて深く受けとめ、それを自分の血とし、肉としていくことの大切さを忘れてはなりません。

『この道をゆく』

雨ニモマケズ　風ニモマケズ…

信楽徳子

先日、衆議院選挙がありましたが、投票日は大型台風二一号の影響で、朝から大雨と暴風が吹き荒れていました。こんな日は家の中でゆっくりしているに限りますが、ご承知の通り、選挙投票のため、雨ニモマケズ風ニモマケズ、近くの投票所に行きました。期日前投票に行けばよかったなと悔やまれましたが・・・・。

テレビの中の候補者の方々は、対立の候補者の欠点ばかりあげつらい、聞くに堪えられません。もっと大きい心で、本当に日本の国を良くしていこうという気持ちと、考え方の違う異質なものに対する理解と寛容さがあればと思うことです。

ひいては国の境を越えて隣国がミサイルを撃ち、もっと遠いところでは宗教をめぐって戦争が起きています。こんな世界の状況を毎日見せられる子どもたちも、友達と仲良くしてゆくことができるのだろうか。

自分さえよければという考え方では本当の幸せはありえないのではないか。

宮沢賢治さんは

「世界全体が幸福にならないかぎり、個人の幸福はありえない。」と言っています。つくづくこの言葉の深さを思い、難しさを思うことです。

安楽寺法要案内

十一月	報恩講	日時　１１月１９日(日) 朝席10:00～　昼席13:00～ 講師　尾道　法光寺 季　平　博　昭　先生 講題　すなおなままの私であるために
十二月	成道会	日時　１２月９日(土) 朝席10:00～　昼席13:00～ 講師　阿賀　宝徳寺 平　原　弘　史　先生 講題　往生
一月	御正忌	日時　１月１３日(土) 朝席10:00～　昼席13:00～ 講師　住職自勤
二月	涅槃会	日時　２月１０日(土) 朝席10:00～　昼席13:00～ 講師　廿日市　最禅寺 米　田　順　昭　先生
三月	彼岸会	日時　３月１１日(日) 朝席10:00～　昼席13:00～ 講師　関西大学講師 源　　淳　子　先生